パネルディスカッション

閉会の挨拶

龍谷大学社会学部教授　里山学研究センター研究員
田中　　滋

皆さま、本日はどうもありがとうございました。龍谷大学社会学部の田中滋です。閉会の挨拶としてほんの少しだけ、まとめにもならないですけれどもお話をさせていただきたいと思います。

本日は文理融合の話も出ましたけれども、龍谷大学の里山学研究センターで研究しておりますと、自然科学系の最新の環境DNA検出装置の話などを聞く機会があります。そうしたときにつくづく思うのは、自然科学というのは常に進化しており、いろいろなことを新たに探り出していくことができる、積み重ねがどんどんできていくということです。

それに比べて、私は社会学が専門なのですけれども、社会学ではなかなか積み重ねというのが難しくて、新しいものが出てきたらみんなそこにワーッと行って、古いものと新しいものとがどういう関係にあるのかというのをあまり考える暇もなく、また新しいものが出てくる。少々誇張が入っていますが、そういうことばかり繰り返しているのです。

社会学というのは、どちらかというと積み重ね型よりは付和雷同型みたいなところがあるのですけれども、自然科学の分野で積み重ねがしっかりとできていく背景にあるのが自然の原理です。これは、神様が作ったのかどうか分かりませんけれども、探れば探るほど新しいものが発見され、しかもそれらを従来の知見ときちんと整合性をもって解明することができる。ところが、人間の現象というのは本当にいろいろな要素が絡み合って出来上がっていて、しかもそれらがお互いに矛盾し合っているわけです。

ここに集まった皆さまは里山とか、自然と人間の共生とか、そういうことに関心のある方々が多いと思うのですけれども、日本を、そして世界を見渡したときに、株価が上がること、どこにお金を投資すれば一番もうけられるのかということだけを考えている人もいますし、どうやって暴力を、武力をふるったらどれだけよその国を制圧できるか、また黙らせることができるかといったことに血道を上げている人々もいるわけです。

本日の話しの中で、文理融合を目指し、また行政の中のセクショナリズムを越えていこうとするときに、「現場に行けばいい」という発言が多くのパネラーの方から出されました。しかし、現実の社会には、お金稼ぎや武力の誇示に夢中で現場に行く気すらないという人がたくさんいるわけです。これが本当に厄介なことなのです。

でも、武力でたくさんよその国の領土をとってきたら豊かになれるとか、株でお金もうけをしたら豊かになれるということの限界を、そう思っている人々に対して里山学とか琵琶湖研究とかを通して示していくことができればと思うわけです。

われわれ人類が21世紀を生き延びていくためには、それぞれの人々がそれぞれの地域の中で生きるしか道がないということを示すことができたら一番いいのではないかなと思っております。

琵琶湖は古代湖であるというのを何人かの方が言われましたけれども、古代湖で固有種が多いということの理由は、ただ古いから固有種が多いわけではないと思います。なぜ琵琶湖に固有種が多いのかというと、林さんの発表でしたか、集水域と県域がほとんど完全に重なっているということがあります。

霞ヶ浦は大きな湖なのですけれども、あそこは近代以前からいろいろな河川が付け変えられて、出たり入ったりしている。利根川やいろいろな川と繋がっては離れしながら、この何百年来ているわけです。でも、琵琶湖というのは周りを山で固まれていて、大きな川が入り込んでこない、そういう非常に特殊な湖であったがゆえに固有種が多いのだろうというふうに思うわけです。

この琵琶湖では、きょうも批判的なお話がいくつも出ましたけれども、かつて琵琶湖総合開発という大規模な開発が行なわれました。その後霞ヶ浦でも、琵琶湖総合開発法のような法律を作ってほしいという要望が茨城県から出されましたが、それ自身は叶いませんでした。

しかし、それはある意味において実現していくわけです。それはどういうことかというと、琵琶湖総合開発で行なわれたようなことを、建設省なりが全国的にやっていく、似たような施策をやっていくという形で展開していって、いわば琵琶総モデルが全国化していくという悲劇的な出来事が起こったのです。

今回琵琶湖保全再生法という法律ができて、たぶんこれも茨城県の霞ヶ浦の方の人たちは、「また琵琶湖にやられた、滋賀県にやられた」という気持ちがあるのかと思うのですけれども、今度は、琵琶湖保全再生法の趣旨がいい形で日本全国に広がってくれたら本当にいいのではないかなというふうに、きょうのお話を聞かせていただきました。

われわれ里山学研究センターとしましても、そういう琵琶湖の研究を通して、きょう山口さんが盛んに言っておられた「現場へ」という体験を積みながら、ぜひとも琵琶湖をモデルにするような新しい考え方作り、それを全国に広げていくことのできるセンターになっていければうれしいなと考えた次第です。今後とも、今日来ていただいた方々にはぜひ応援していただきたい、そして共に歩んでいただけたらと思っております。

きょうはご多数参加していただきまして本当にありがとうございました。最後にもう一度パネラーの方に拍手を送って、きょうの閉会としたいと思います。ありがとうございました。